

## 目次

## 土屋小学校・前期

- |                               |                     |
|-------------------------------|---------------------|
| 1. 教育現場での活動から改めて実感できたこと・学んだこと | 小林 将人 . . . . . 141 |
| 2. 学校を支える存在                   | 伊藤 大祐 . . . . . 142 |
| 3. 児童生徒とのコミュニケーションと経験         | 山下 直人 . . . . . 143 |
| 4. 教師目線での学校                   | 猪川 雄斗 . . . . . 144 |
| 5. 新たな発見                      | 福地 雅子 . . . . . 144 |
| 6. 人を育てる                      | 相馬 夏実 . . . . . 146 |

## みずほ小学校・前期

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| 7. 今の私たちにできること | 大和 文謙 . . . . . 147 |
|----------------|---------------------|

## 土沢中学校・前期

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 8. 教師でも生徒でもない者だから見えるモノ | 水谷 友洋 . . . . . 148 |
| 9. 子どもの成長と私の成長         | 蓼沼 礼敬 . . . . . 149 |
| 10. ボランティアから学んだ情報      | 小林真理子 . . . . . 150 |
| 11. 精進                 | 渡辺 美優 . . . . . 151 |
| 12. 学校で勉強を教えるということ     | 石井 優 . . . . . 152  |

13. 「生徒とのキャッチボール」の大切さ	伊藤 大樹	・ ・ ・ ・	153
14. 教えること, クラスをまとめることの大変さ	岩下 祐樹	・ ・ ・ ・	154
15. 教えるということ	高橋 雄亮	・ ・ ・ ・	155
16. 教育の壁～クラス間の違い～	横山 貴裕	・ ・ ・ ・	156
17. 一人ひとりに合った教え方をする難しさ	石川 航大	・ ・ ・ ・	157
18. 教師という職業	田中 悠平	・ ・ ・ ・	158

秦野曾屋高等学校・前期

19. 1つのクラスを持つということ	小椋 光	・ ・ ・ ・	159
20. 風が吹いたら桶屋が儲かる～論理的思考を定着させるために～	西田 紘章	・ ・ ・ ・	160
21. 教師の必要性和それに伴うべき能力	丸山彩恵子	・ ・ ・ ・	161

## 土屋小学校・前期

### 1. 教育現場での活動から改めて実感できたこと・学んだこと

生物科学科 科目等履修生 小林 将人

科目等履修生という立場上時間に余裕がある私は、前期の学校ボランティア活動期間のほぼ毎週月曜日から木曜日までの午前中を土屋小学校で過ごしました。学部生の人たちと違い多くの時間を小学校で過ごすことができた結果、他の人よりも多くのことを学ぶことができたと思います。

この学んだ事の中からルール・勉強・設備について印象に残った事を短めにまとめていこうと思います。また、どのような活動をしたのかも記していこうと思います。

まず、1年生の教室で、運動会で使うボンボン作りをした時の事です。それぞれ色の違うスズランテープを2つ使って作る作業でしたが、1年生のため一回説明しただけでは作り方がよくわからない子が多く、ついつい手伝いそうになりました。しかし、担任の先生から「子どもが頼んでくるまで手伝わないように。」と言われました。これは、子どもが「何も言わなくても助けてくれる」と思わないようにするために、子どもに自分の口から「どうしたいか?」「どこがわからないか?」と助けを求めさせることが大切だと知りました。これには『自分の力で色々なことが出来るように』という狙いがあると教わりました。

次に、『発言する人は手を上げて発言する』ということの大切さを学びました。一見当たり前のことですが、実際に教室で授業を見てみると手を上げないで答えを言おうとする子が意外と多く、好き勝手に発言させていると、まとまりがなく授業がスムーズに進まないであろうことが一目見ただけでわかりました。『発言する人は手を上げて』というこの決まりは授業をス

ムーズに進めるのに必要不可欠であることが改めてわかりました。また、ちゃんと手を上げた人をさすことで、勝手に答えてしまう子にもルールを守るように促していると思いました。

次に、1年生が下校する前に行う「帰りの会」のときの事です。みんな席についているのに1人だけなかなか席につかない子がいたので、私はその子を席につかせようとしたのですが、担任の先生に「その子が自分で席に着くのを待つように。」と言われました。これは、あえてその子の相手をしないことで、その子に『周りの空気を読ませる』ことを促していると感じました。

次に、6年生の算数の授業で、問題でわからないところを教えているときの事です。その日は文字を使った文章題(答えは選択式)を勉強していました。その解き方を教えるとき、算数が得意な子と苦手な子で教え方を変える必要があることを改めて実感しました。苦手な子には、組み立てた文字式に選択肢の答えをしらみつぶしに当てはめていき、式の仕組みを理解させるような指導をする必要があると教わりました。このことから、『個々のレベルに合わせた指導』がとても大切なことだということを実感の意味で実感できました。

土屋小ではどの学年の子も椅子に座布団を敷いていました。しかし、それは座布団ではなく防災頭巾で、避難訓練のときにはその頭巾を頭に被って避難していました。また、土屋小に限らずほかの学校でも、教室に掛けてあるカーテンは防火性で燃えにくく、火の回りを遅くしていることを知りました。このことから、もしものときのために身近なところから防災対策をしておくことが大切だと改めてわかりました。

他にも校務の小泉さんと作業をしたり、運動会の準備や当日の手伝いをしたり、4年生の老人ホーム交流会に付き添って行ったり、教頭先生の授業を見学したり、1年生や2年生と給食を食べたり、外国人の先生の英語の授業を見学したり、休み時間に子どもたちと遊んだり、

いろいろと貴重な経験が出来ました。実際に教室にいて、ここに記したこと以外にもいろいろなことを学ぶことができ、私にとってとても有意義な活動となりました。この活動に参加することができて、本当によかったと感じています。

## 2. 学校を支える存在

情報科学科 4年 伊藤 大祐

私は毎週火曜日に土屋小学校でボランティア活動をさせていただきました。一日の流れとしては、まず、主に1年生の児童と一緒に給食を食べたり、昼休みは一緒に遊んだりしました。その後授業に入り、その授業を見て学んだりお手伝いをしたりするか、若しくは校務作業をお手伝いしました。授業のお手伝いとしては、プリントをコピーすることや裁縫で玉結びや玉留めができていない児童に教えたり、ヘチマと一緒に観察したり、ソーラーカーの組み立てを手伝ったり、児童と一緒に運動会で使うボンボンを作ったりしました。菊づくりのお手伝いもしました。校務作業のお手伝いとしては、花をプランターに植えかえたり、草を刈ったりしました。また、近くで不審者が現れ、保護者が児童を迎えに来ていたので、保護者の誘導をしました。

私が小学生のころは、用務員さんが草を刈ったり、お花を植えたり、水をあげたりしていたのは知っていましたが、他にどのようなことをしていたかといわれるとあまり思い浮かびませんでした。用務員さんの仕事はこのくらいかなという感じだったので、あまり大変だとは思いませんでした。また、その頃はただ学校に来て作業してるなあというくらいにしか思っていない、一つ一つの作業にどのような工夫をしながらやっているのか全く知らず、知ろうともしませんでした。

私は今回初めて学校ボランティアをさせていただきました。そのため、校務作業を行う前に学校内の外側をまわりながら説明をしていただきました。そのときに小さい木の形が、普段見ているようなものとは程遠い異様な形をしていることに気がきました。どんな形かというと、前からみれば葉が茂っているように見えますが、後ろから見ると前の景色が透けて見えるくらい葉が剪定されていました。「何でこんな形をしているかわかる？」と質問されましたが、全く見当もつきませんでした。これは、蜂が巣を作らないためや毛虫などの害虫がいてもすぐ気付くためだということでした。このような木の形状にすることで児童が事前に害虫に気づくことができます。さらに、このような校務作業をしているときも気づきやすくなります。実際に木を切るときには、刃物などの色々な機械を使います。この作業は危険があるので昼休みが終わってすぐに校務作業のお手伝いをするときには、児童が教室に戻ったかを確認しました。また、児童が外に出ないような時間帯に移動し草刈りを行っていました。

6月11日、北金目で不審者が現れました。少し距離もあるということで、学校では普段通りの授業が行われていました。私も用務員さんと一緒に校務作業を行っていました。この日はいつもと違ってただ作業をするだけでなく、不審者が入ってこないかなどに気を配りながら作業をしていました。このような場面でも児童を危険から守っていました。

私が校務作業を行うときには、必ず用務員さんがいますが、普段は用務員さんが一人でやることばかりです。重い機械を使ったりすることもあります。夏場は暑い中の重労働です。このような苦労は実際にやってみないと分からないと思いました。ボランティアを通してこのような経験をさせていただいたことで、なかなか学ぶことができないことを教わりました。学校は教師が児童を教育している場ではありますが、その裏には児童が勉強しやすい環境を作った

り、児童に危険が及ばないようにしている人の存在があります。これを忘れずに感謝をしつつ、私自身も子どもたちにとって校内の危険な場所を見つけることができると思うので、気づいたときには改善していきたいと思います。

### 3. 児童生徒とのコミュニケーションと経験

化学科 4年 山下 直人

私は5月から7月の間に計4回土屋小学校で学校ボランティアとして活動させていただきました。時間は12:40～15:30で、主な活動内容は、低学年の児童との給食、授業の補佐、運動会の準備、プール清掃、クラブ活動でした。授業の補佐では、3年生の音楽の授業に参加させていただき、教師側の立場で実際生徒に関わるという貴重な経験をさせていただきました。クラブ活動は授業とは少し違う形での児童との関わり合いになり、また違ういい経験になりました。また、校務作業にも参加させていただきました。運動会の準備やプール清掃を通して、このような作業を行っている事務員さんがいるから学校という組織はしっかり動くんだなということを感じることができました。

今回の土屋小学校での小学校ボランティアから自分が一番学んだことは、児童との関わりの経験は大切で、時間ではなく質なんだなということです。これは2つのことから考えました。

まず1つ目は毎回一緒にボランティアに行っていた人の存在です。彼は多くの回数ボランティアに参加していることもあり、とても児童と仲が良かったです。僕は初め、これは時間の長さからくる経験によるものだと思いました。しかし、彼の児童との接し方や関わり方を近くで見ていて、これは時間の問題ではないんだなと思いました。彼の児童とのコミュニケーション力はぜひ見習っていきたいと思いました。

2つ目は数多くボランティアにきている先輩

と児童との接し方を近くで見たときに考える事がありました。給食が終わって騒いでしまっている児童に注意をしていたのですが、全然話を聞いていませんでした。もともと、その先輩はあまりうまく児童と接していないなと感じていて、やはり児童は正直に態度に出るんだなと思いました。以上の2点より時間ではなくて質なんだと強く思いました。

自分は昼休み一緒にサッカーしたり、遊んだりして少しずつ児童との距離を縮めることができていたので、実際将来教職に就いたときは今回の経験を活かし、児童生徒と良い関係を築ける教師に成れるよう努力したいと思います。

次に自分がボランティアから学んだと思うことは、学校は児童生徒、教師、校務員など全員がそれぞれの立場でそれぞれの役割を果たすことにより成り立つんだと言うことです。これに関して自分は校務員さんの仕事を手伝っているときに思いました。校務員さんの仕事は昔児童として学校に通っているときは何にも意識していませんでした。しかし今回校務員さんの仕事を手伝わさせていただいて、校務員さんがいるから学校が円滑に回るんだと強く思いました。学校内外の整理からイベントの準備まで様々なことを一人でしてほんとにすごいと思いました。これは学校ボランティアに参加しなければ分からなかったことなので、今回参加させていただいて良かったなと思いました。

最後に、自分は生徒と友達のような関係で接しながらもしっかり尊敬されるような教師になりたいと思っているので、今回のボランティアから得た「経験は時間ではなく質」と言うことを考え、うまく生徒と接することのできる教師になれるように努力していきたいと思います。今回大変貴重な経験をさせていただいた土屋小学校の方々に心から感謝いたします。

#### 4. 教師目線での学校

化学科 3年 猪川 雄斗

私は毎週水曜日の12:30～15:00に平塚市立土屋小学校へ学校ボランティアに行きました。主な活動として1・2年生と一緒に給食を食べ、昼の清掃の手伝いをし、昼休みには子どもたちと遊び、5時間目の授業の補助または校務作業の手伝いなどをしました。

今回の学校ボランティアでは、校務を通して学校の裏の仕事の大切さを知り、給食や休み時間を通して自分に寄ってこない子どもとのかかわり方を考えさせられ、教師を目指す立場となって受けた授業では発見の連続など、勉強になることばかりでした。

校務で普段の仕事の話や、路上に面していない内側の木の枝を切り整えることで蜂の巣ができないよう、仮りにできても早期に発見できるように工夫しているという話を校務員の小泉さんから聞き、実際に木の剪定や使えなくなった箒の解体を行ったことで、自分が小中学生の時に何も気にせず授業を受けたり、遊んだりできていたのは、裏で校務員さんが子どもたちのことを考えながら細かくサポートしてくださっていたおかげだったのだということに気づきました。

また、給食や休み時間では、学校ボランティア1日目に教頭先生からかけていただいた「好いて積極的に寄ってきてくれる子どもだけではなく、恥ずかしがって話しかけに行けない子に気づいて話しかけていく」ということの難しさを実感しました。初めは私に興味を持ってくれて質問してくれたり、くっついてきたりする子と話したり休み時間遊んだりすることが多かったのですが、このアドバイスを意識することで、教室を広く見られるようになり、多くの子とかわることができるようになりました。

授業は3・4年生の体育を3回、5年生の理科

と音楽、2年生の国語、3年生の理科、と多学年の色々な教科の授業を見ることができました。3年生の体育の授業の始めには、教室で水遊びをしていた児童を指導する場面がありました。この時、ただ叱るだけではなく、なぜやってはいけないのかを子どもたちに考えさせながら指導していたので、子どもたちも納得して反省している様子でした。メインであるダンスの覚えは驚くほど早く、この授業の後半にはごほうびとして子どもたちがやりたがっているドッチボールをすることになりました。子どもたちの大喜びしている姿を見て、叱るところは叱り、褒めるところは褒めるメリハリの大切さに気づきました。私は同日の給食の時間に立ち歩いている子を「給食の時間はふらふら立ち歩いちゃだめだよ」と理由も説明せずに注意していたので、次の機会ではなぜだめなのかを考えさせ、納得してもらった上で指導しようと思います。

また、理科の授業では解り易いところで、当てられる前に答えを言ってしまう子がいるような問題でもあえて手を挙げている子に聞くことで、子どもたちがより積極的に授業に参加しているように感じました。

教師を目指すようになり、模擬授業も経験したことから目線が生徒ではなく「自分ならどう教えようか」ということを考える教師の目線になったことにより、授業ではこの他にも沢山の発見がありました。

今回の学校ボランティアで学んだこれらのことをしっかりと自分のものにして、来年の教育実習に向けて教師として必要な力をつけていこうと思います。

#### 5. 新たな発見

生物科学科 2年 福地 雅子

私は、前期に平塚市立土屋小学校に学校ボランティアとして行きました。5月8日～7月3

日までの全9回（毎週水曜日9：30～13：10）と運動会のお手伝いに参加させていただきました。授業のサポートが主でしたが、数回校務さんのお手伝いもしました。

今回のボランティアから、児童の成長力と、学年による児童との接し方の違いについて考えました。運動会という大きな行事から、練習や本番を通して私は上記に挙げた2つのことを1番感じたので今回のテーマとしました。

私が最初のボランティアで入った授業は6年生の算数でした。初めてのボランティアということもあって、不安や緊張もしつつ、でも児童と仲良くなりたいたいというワクワクした気持ちで教室に入りました。しかし、6年生の教室に入っても挨拶してくれる子は少なく、口には出さないが「なんでいるの？」みたいな雰囲気を感じました。授業では分数の練習問題を解いていましたが、聞いてくれる子も少なく私自身どうしていいかわからず、ただ児童の周りを歩き回ることにしか出来ませんでした。

次の授業は運動会の練習のため、5、6年生合同の組体操の練習を見ていました。その日の練習では、ボランティアは何をしていいかわからず見ただけで終わってしまいました。その日の給食は1年生のクラスに行き、1年生がよく話しかけてきてくれるので接しやすく可愛いなと思いながら、6年生への接し方をどうすればいいかと考えました。

毎週ボランティアに行くと必ず組体操の練習がありました。1回目の反省も生かし、私たちも参加しました。複数人で行う組体操の技では、私たちが土台になり、少しだけ6年生の男子と話しました。些細なことがきっかけでしたが、次の週にボランティアに行ったときにも話しかけてきてくれました。大学生である私から話かけなくてはいけないのに話かけられず、お互いにガードを張っていたのかな、と今になって思います。

成長力については、組体操の練習で感じました。初めはやる気のない児童も多く、先生に

全体で説教を受けていました。私から見ても、6年生は去年もやっているはずなのに動きがバラバラでむしろ初めての5年生とさほど大差がなく、1か月後の本番に間に合うのか心配な状態でした。しかし、私がボランティアにいく度に、児童たちは前の時間に注意された技や移動の動きが出来るようになっていました。組体操はみんなでやる競技なので協調性が求められ、ピラミットのように小学生の身長よりもはるかに高くなる技もあります。その危険性を児童一人ひとりが自覚していくのが目に見えるようでした。今の私より覚えることが早く、その上達ぶりに正直驚かされました。本番が近づくとつれてより一生懸命な表情で練習に取り組んでいて、「かっこいいな」と思いました。

「一生懸命がかっこいい」。児童たちが練習に取り組む光景を見ていて、私の中学のときの担任がよく言っていた言葉を久しぶりに思い出しました。大学生になって、忙しさのせいで勉強を疎かにしてしまうことがあったので、小学生の何事にも一生懸命取り組む姿から教わったような気がしました。そして、私自身の日頃の意識を見直すきっかけになりました。

今回のボランティアで小学生と関わったことで、私自身たくさんのことを学ばせてもらいました。中でも6年生ぐらいになると思春期になり、自分からの関わりを避けようとするのがわかりました。このことより高学年では私から話しかけたほうがスムーズにコミュニケーションが取れ、低学年では児童の方から話しかけてきてくれるという違いに気付きました。また、運動会という1つの行事を通して児童と仲良くなることができ、行事の大切さがわかりました。今回のボランティアから学んだことを、今後の教職で生かしていきたいと思います。

## 6. 人を育てる

生物科学科 2年 相馬 夏実

5月8日から7月3日までの9回(毎週水曜日9:40～13:10)と運動会に平塚市立土屋小学校で学校ボランティアとして活動させていただきました。各クラスに入り授業のお手伝いや校務の仕事、運動会の準備、練習などまた給食をクラスに入って食べたりとさまざまな場面で子どもたちと触れ合うことができました。

私がこのボランティアを通して感じたことは教師は各教科の授業を教えるだけでなく、児童の成長過程で出会うさまざまな問題の解決への指導、援助など児童の心の成長を手助けする立場にもあることを知りました。

印象に残っている授業は高学年の体育の授業のことです。運動会が近かったこともあり5,6年生合同で組体操の練習をしていました。6年生は昨年の運動会でも組体操をやっているのので5年生の見本となって練習に取り組まなければなりません。しかし、6年生はやる気がないだけではなく、5年生が一生懸命になってやろうとしているにもかかわらず、協力して手伝おうとするようにもみえませんでした。また、組体操は1人でできる技もあれば、大人数でやる大技もあるため、1人でもやる気がなかったり、集中力を切らしてしまえば大きな事故になりかねません。5,6年生は全体で集められ、注意を受けていました。やはり、けがをしてからでは遅いこと、6年生は積極的に5年生をリードして引っ張っていかなければならないことなど基本的なことでした。私が心に残ったのは運動会は何のためにやるのか、誰のためなのか、児童に質問を投げかけていたことです。児童たちは最初は何を言っているのかわからないといった表情で先生の話聞いていましたが、いつもと違う先生にだんだんと真剣に話を聞くようになりました。最初私も先生がこの質問を児童にする意味がわからなかったのですが、先生は自

分たちのために運動会に協力してくれている人たちがいること、運動会は自分たちで力を合わせて作ってこそ意味があることなど先生や周りの人に言われて気づくのではなく、自分で気づくことが大切であることを児童に指導していました。生徒たちは一人一人自覚し、一生懸命に練習に取り組むようになっていました。本番の運動会は私も少し参加させてもらい、組体操を見ましたが、今までの練習よりもみんなの息が揃っていて笑顔が輝いていました。私も見ていてすごく気持ちよかったです。

今回のボランティアで私自身も実際の教育現場を見ることができ、たくさんのことを学ばせてもらいました。先生方がただ児童を叱るのではなく、児童に自分で気付かせることで意識を高めさせたり、児童一人一人と向き合い問題を解決するための手助けをしているのが印象的でした。私は今回のボランティアで学んだことを忘れず、児童一人一人の心に寄り添い、自分も共に成長できるような教師になりたいです。

## みずほ小学校・前期

### 7. 今の私たちにできること

情報科学科 科目等履修生 大和 文謙

この1年間みずほ小学校に学校ボランティアとして通いました。活動内容は授業の補佐が中心であり、解答の丸付けや児童のわからないことがあれば個別で対応することもありました。基本的には体育や図工など教員にとって手のかかる授業に参加することが多く、児童と共に活動することや手本を見せて指導することもありました。

今回の学校ボランティアで感じたことは、学級経営を行うことの難しさです。私は前年度もみずほ小学校の学校ボランティアとして参加していたため、児童や学級に対して大きな期待と僅かな不安を持っていました。学級を観察して捉えていた私の期待と不安は、学年と学級、そして教員が変わることによって大きく変化しました。

今回は学級経営に作用した要因について考えるとともに、私たちが教員として働く時に学級経営を円滑に行うために、今私たちが出来ることについても考えてみます。

3年生の頃はAクラスでは学級の約束事やマナーが児童に浸透し、児童がお互いを注意し合う理想の学級のように見て取れました。一方、Bクラスでは、落ち着きがない児童が数人いるものの教員に注意を受ければ、素直に聞くことが多く心配するほどではありませんでした。

しかし、新4年生になってクラス替えが行われ、他のクラスだった児童と新たなグループを作り、教員に反抗的・批判的な態度を取るようになってしまったのです。

一般的に4年生の学級について考えると、学級経営を行うことで児童に一番影響を与えるのは、担任であることは間違いありません。他に

も仲の良い友達と一緒にいることや離れてしまうこと、児童の発達段階も影響があると考えられます。他の児童の影響力の大きさについて発達段階で考えれば、小学4年生は少人数で仲間を集めて徒党を組み、自分たちの独自のルールを作る時期です。この小集団は、今まで教員が期待していた児童の態度に変化をもたらす可能性もあります。

#### ①何を意識して学級経営に臨むか

4年生の学級経営を円滑に行うためには、児童に「この先生と1年間やっていけそうだ」と思わせることが大切だと思われます。児童たちと初めて会ったその時に、児童が自分たちで約束事や学級でのマナーを考えさせ、指導することが求められます。

次に学級経営には教員が児童たちに対して、「こういう学級になってほしい」という気持ちも大切であり、「何度言ってもだめ」「もう仕方がない」といったことを考えてしまえば、ゴール効果となりクラス経営は困難になると思われます。難しいことかもしれませんが、児童に対して常に期待を持ち、児童の褒めてほしい事を見極めることが大切だと考えられます。

#### ②私たちができること

1つ目は学校ボランティアに積極的に参加し、多くの児童・教員とかわりを持つことであり、教員の授業内容や児童への対応を見て学び、その教員の考えを聞くことが大切だと思います。教員の意図を私たちの判断で推測するのではなく、単刀直入に「なぜあの時にこの指導の仕方をしたのか」「なぜこの言葉を選んだのか」を知り、経験豊富な教員の知恵と知識を学ぶことが必要だと考えられます。

2つ目は自分の特技を作ることです。例えばピアノを上手に弾くことができる、絵をうまく描くことができる、板書が綺麗で見やすいものであるなど児童が「すごい」「真似できない」と尊敬できることを強みとして持つことも大切だと思われます。

最後に児童が安心できる環境を作るためには  
教員が楽しい空間を作らなくてはなりません。  
なぜ教員になりたいのか、という思いをもう一  
度考え直し、その思いを強く持ち続けることが  
大切だと思います。

## 土沢中学校・前期

### 8. 教師でも生徒でもない者だから見えるモノ

化学科 科目等履修生 水谷 友洋

私は、平塚市立土沢中学校にて学校ボラン  
ティアとして毎週火曜日の5月7日から7月  
16日まで2,3時間目の間に活動した。2時  
間目は一年生の数学、3時間目は理科や数学、  
探究などの様々な授業に参加させてもらった。  
授業に参加する中では演習の正誤確認をしたり、  
アドバイス、解説、話し合いを促したりする  
立場であった。

今回、学生ボランティアとして授業に参加し  
たのは、「学生ボランティア」という視点であっ  
た。今までにはなく、これから先にもない、今  
まで自分自身が授業に関わってきた立場である  
「生徒」でもなく、これから立つことになるだ  
ろう黒板の前で授業を行う「教師」でもない立  
場である。そこでは、今までに思いもしなかつ  
たことを見る事ができた。それは、多くの生徒  
が理解できる工夫や生徒を巻き込んだ導入、自  
ら進んで学ぶ姿勢を身に付ける演習など様々な  
ものであった。私が学習内容を身につけられた  
のも、気付かないうちに隠し味として授業に仕  
込まれていたこれらの工夫のおかげではないだ  
ろうか。

主に関わった数学の授業では、新しい単元  
に入る際に、教科書を開かずに黒板を用いて説明  
を行う形式だった。塾で予習をしている生徒も  
ほかの生徒と足並みをそろえて同じ課題に向  
かって学ぶという授業であった。例題の解き方  
を、黒板に途中式を書きながら「今まで習った  
ことを用いてみんなに説明する」というもので  
あった。生徒たちは自信満々に手を挙げ、黒板  
で問題を解き、正答を導き出すことができる  
が、うまく説明することはできない。問題を解  
くことはできるが、その解き方の意味を理解し

ていなかったのである。数人の生徒が黒板で説明を行い、誰のどこが正しい、間違っている等を発言しあうことで一つの課題にクラス全体が参加する事ができているのである。初めての単元でもすべての生徒が新しい「学び」を受け取ることができる授業を行っていた。

文字式の問題では、ポカリスエットなど身近な商品名を出す事によって生徒の興味を引く工夫があった。「僕はアクエリアスがいい！」等の声もあがり、淡々とした雰囲気を一転させる事ができるものであった。集中力を維持させることや回復させる技が所々に隠されていて、つられて笑ってしまう事があるくらいであった。

理科の授業では、各章のテストプリントをテスト形式で行うのではなく、『①自力で解ける問題を解き、わからない問題は飛ばして一通り解く』『②今までの授業で自分の取ったノートや教科書を見ながら問題を解き、わからなかった問題を埋めていく』『③答え合わせを行う中で丸付けをするだけでなく、間違ってしまった理由を考えながらも一度問題に向き合う』というものであった。演習形式を工夫することで各章の定着度合の違がある場合でも、それぞれの生徒にあった内容のさらなる理解を深める学習ができるように工夫されていた。自分自身ができる問題とできない問題を知ること、苦手を把握することができるので、次に強化すべき内容や目標を知ることができる機会になっていた。

他にも生徒たちが大きく盛り上がる様々な工夫があった。そんな隠し味を仕込む教師は「まだまだ盛り上がり足りない、全員に浸透できていないため、より良くする必要がある。」と話してくれた。思いついた工夫を生徒に披露し、それで満足するのではなく、より良くし続けることが教師に与えられた目指すべき方向である。これは、生徒と教師が二人三脚で作っていく「授業」という作品をよいものにするために必要である。「学び」を教える中で教師も生徒から「学び」を受け取り共に学んでいる生徒

であるように見えた。これは教師を目指す者にとって、心に置いておくべき、大切なことである。

## 9. 子どもの成長と私の成長

化学科 4年 蓼沼 礼敬

私は5月から7月にかけて、週に一度土沢中学校で学校ボランティアとして活動させていただきました。主に理科と数学の授業の補佐をやらせていただきましたが、数学の補習の手伝いや、授業に備えて理科室での実験の準備、実験器具の整備などもやらせていただきました。

私は昨年春から夏にかけて小学校で学校ボランティアをさせていただいたので、昨年小学6年生だった子どもたちと中学校で再会することになりました。彼らも私のことを覚えていてくれたので、1年生の授業に参加させていただいた時には、毎回多くの生徒から声をかけられました。中学生として再会した子どもたちは、身も心も成長していました。背が伸びたり声が低くなったりするのはもちろんですが、以前よりも授業をしっかり受ける様子や、掃除や部活動に一生懸命に取り組む姿がありました。

その中でも特にはっきり変わったと思える子がいました。彼は昨年の小学校ボランティアで関わった時に、クラスの中で真っ先に私に話しかけてきた、とても明るく積極的な子でした。しかし授業中も元気であまり落ち着きがなく、少し生意気な印象がありました。「中学生になってもきっと彼は変わらず生意気なんだろう。」私はそう思い込んでいましたが、彼を見て驚かされました。授業中は周りの子と話すこともほとんどなく、静かにノートを取っていました。私や他の大学生が席の近くを通りかかると話しかけてくることもありましたが、それはちょっかいを出すためではなく、問題の解き方が分からない場合やきちんと解けているかを確

認してほしい場合が多かったです。休み時間にはいつもの元気な様子が見受けられましたが、その中でも私たち大学生や先生と会話する際には、しっかり敬語を使って話そうとしていました。以前は敬語なんてまったく使われたことがなかったので、初めて彼の口から敬語が出てきたときには、私の方が一瞬戸惑ってしまうほどでした。あまり多くは活動できませんでしたが、彼を始め、どの生徒も中学校ボランティアを始めた5月や昨年に比べると、確実に成長していることを活動する度に感じました。

もちろん良い変化ばかりではなく、そうでない変化もありました。授業を聞かずに机に伏せて寝てしまう子やペンで遊び出してしまいう子も、時間が経つに連れて何人か見受けられるようになりました。しかし、そんな生徒とも接することで、私自身も少しずつ成長することができました。

授業に対してやる気のなさそうな生徒には声をかけて、微力ながら授業への参加を促すことができるようになりました。また、彼らに質問されて問題の解き方を教える時に、より細かく内容をかみ砕いて解説したり、あるいはその前後の問題や類題を使って解決のヒントを与えたりと、その個人によって少しずつ教え方を工夫することもできるようになりました。また、休み時間中の対応も、無邪気な生徒たちと今まで通り接していく中で、危険性のある行動についてはすぐに注意できるようになりました。昨年は自分からなかなか注意することができなかったので、これは大きな成長のひとつだと思います。ほかにもおとなしくして話してくる様子がなさそうな生徒にはこちらから話しかけられるようになったり、注意する場合に限らず、生徒たちと話をする時にはしっかり彼らの顔を見て様子を確認しながら話せるようになったりできるようになりました。

彼らと触れ合うことを通して、子どもと関わる一人の大人として、教員として大切な要素を徐々に身に付けることができてきたと思います。

そしてそれ以上に、子どもたちの成長する姿を見られることはとても嬉しいです。今回の経験から教員のやりがいを再確認することができたので、教員になるという目標に向かってより一層努力していきます。

## 10. ボランティアから学んだ情報

情報科学科 3年 小林真理子

私は今回土沢中学校での情報のホームページ作成のボランティアに行ってきました。時間帯は月曜日の午後からで、最初のうちは14時くらいからでしたが、中学校の授業と被っていたため途中から14時半くらいに変わりました。活動時間はほとんどバラバラで、だいたい15時半から17時の間に終わるような内容でした。活動内容としては、土沢中学校のホームページの更新が主で学校だより「ささりんどう」や「日常の記録」などをホームページに更新することでした。そして、今回はホームページの更新に加えて、姉妹校のホームページの記事を廊下に張り出す作業もやらせてもらいました。

情報のホームページ作成のボランティアに参加したのは、今回で二回目になります。そのため、主な内容は前回と同様なので、そこまで時間を必要としないで終われると思っていました。しかし、実際にホームページの更新をしていくと、更新の仕方が少し変わっていました。特に前回と更新の仕方が変わっていたのは、「日常の記録」の更新でした。「日常の記録」の更新は中学校が用意した文章や画像をホームページに載せる作業です。今回はこの作業がとても大変でした。でも、この大変な作業のおかげでホームページの作成を前回以上に学ぶことが出来ました。

前回の情報のボランティアでは「日常の記録」を更新する時は、そこまで苦勞しませんでした。しかし、今回は画像の貼り付けが出来な

かったり、文章の改行が上手くいかずにページが大きくなったりしてしまいました。最初は前回との違いに戸惑ってしまい、時間が予想より長く掛かってしまいました。ネットでホームページの作り方を調べたり、いろいろと更新の仕方を変えてみたりしました。しかし、結果的には一回目のボランティアでは「ささりんどろ」の更新ぐらいしか出来ませんでした。画像の更新は分からなかったもので、担当の先生に画像の更新が上手く出来ないことを伝えて、その日のボランティアは終了しました。この画像の貼り付けが出来ないだけでも「日常の記録」の更新以外にも部活動のページの更新も出来なくなり、作業に大きな支障が生じてしまいます。

そして、次のボランティアの日には担当の先生が画像の貼り付け方を調べておいてくれました。そのおかげで、「日常の記録」の更新の際に画像を添付することが出来るようになりました。

今回のボランティアを終えて、去年のボランティアと違うところがたくさんありましたが、それによりホームページの更新の仕方や文章の保存形式などいろいろとコンピュータについて学ぶことが出来て、とてもいい経験になりました。大学ではコンピュータを使った授業は多いのですが、ホームページを作成する機会はほとんどないので、このような機会はとてもいい経験だったと思います。

## 11. 精進

情報科学科 3年 渡辺 美優

私は土沢中学校で、ホームページ更新のボランティアに参加させて頂きました。ホームページ更新のボランティアが1人しかいなかったため、急遽途中参加し、月に3回ほど14時30分頃から、学校たよりの更新や、校長先生の要望に沿ったホームページの内容の修正や改善、学

校生活の紹介の記事の更新などを行いました。ホームページの更新がメインでしたが、他にも姉妹校である龍北中学校の紹介のための掲示物を作りました。毎回2,3個ほど作業をこなしていき、作業時間は日によってまちまちで、15時30分頃に終わることもあれば、17時過ぎまで作業をしていることもありました。

今回の活動を通して、相手の要望通りに叶えるのは大変だということがよく分かりました。大変だけど、けっして不可能なわけでは無く、努力をすればできる。だから日々精進すること、そしてそのための努力を惜しまないこと。その大切さが身にしみて分かりました。

私自身ホームページの更新のお手伝いは今回が2回目であり、担当して下さる先生も変わらないとのことで、参加前はもう慣れてるから作業も簡単にこなせるだろうと思っていました。しかし、いざ更新の作業が始まると、ホームページに張ってある写真が、更新するために使っているソフト上では反映されているのに、ネット上で見ると反映されないというトラブルが起きました。このようなトラブルは今までおきたことが無く、インターネットで調べたり、色々と試してみたりと解決を試みたのですが、結局上手くいきませんでした。解決策は見つからず、時間もかかってしまったため、終わらせるべき作業が終わらず、次回に持ち越しという形になってしまいました。その後、先生がなんとか解決策を見つけてくださったのですが、結局原因は分からずじまいでした。他にも、更新するために、先生方が文書のデータを用意して下さるのですが、そのデータを開くことができなかったことがありました。データは毎回wordで作ってもらっていたのですが、そのときのデータは別のソフトで作っていたようで、そのソフトが作業を行うパソコンの中に無かったことが原因でした。この時は、時間は掛かりましたが、なんとか自分たちで解決することができ、作業を終えることができました。また、画像が反映されないトラブルはもう一回6月に

起こりましたが、その時は問題なく対処することができました。

このように問題が度々起き、また解決できなかったものもあり、自分の力の無さを感じました。他にも、学校日より「ささりんどう」の更新の際、校長先生にタイトルもつけて欲しいと言われたのですが、これは言われる前にこちらから申し出ることもできたことでした。言われた後、ホームページに長く触れているのだから、作業をする際に、ただ言われたことをやるだけで無く、より良いホームページになるよう、私ももっと配慮や工夫を考えて、更新すれば良かったと思いました。

教師には、教えるための知識が必要ですが、それよりも生徒と接するために配慮や気遣いが大切だと思っています。今回のボランティアで生徒と触れあう機会はありませんでしたが、このような作業においても、気遣い、配慮を養っていけたらと思っています。勿論知識面も疎かにしてはいけませんので、自ら進んで勉学に励みたいと思っています。そして、自分自身も精進していければと考えています。

## 12. 学校で勉強を教えるということ

化学科 3年 石井 優

私は、毎週金曜日3時限目の時間に土沢中学校で学校ボランティアをさせていただきました。内容は主に数学と理科の授業の補佐をしていました。特に2年生の数学を多く担当していました。また、ただ授業を見学するだけでなく、分からなそうにしている生徒がいれば積極的に教えることなどをしていました。特に、2年生の数学は連立方程式の計算がほとんどだったので計算中心で授業の補佐がしやすい環境でした。

今回私がボランティアに行って一番感じたことは、学校で教えることの大変さ、集団授業の

面白さと難しさです。私は普段アルバイトで個別の塾のほうで子どもたちに勉強を教えています。個別ではその子一人一人に合わせた授業、その子に直接、指導することが出来ます。ただ、学校はそうはいきません。様々なレベルの子がいるし、ましてや20人、30人いる生徒を前に一回の授業で全員を分からせなければいけません。今まで何気なくみていた学校の授業も教師側の立場から見ると、先生が様々な工夫をして授業をしてくれていたんだなと思いました。また、授業を見学する中で、これはもっとこうしたかったんだなと思うような授業もありました。例えば、理科の授業の中でその授業に関連のある話題を生徒に振った。最初はみんな考えていたものの一人の生徒が発言すると次から次へと意見が発展して行ってあまり関係のない話になってしまった。その先生はさらっと話題を授業の方に戻していたが、そうなった時の対処などを学ばせていただきました。また、今の中学生はいろんなことを知っているの、自分もいろんなことに興味を持って知識を増やさなければいけない、いろんなことを経験しておかなくちゃいけないと改めて思いました。それが授業を盛り上げていく話のネタにもなっていくなとも思いました。

また、塾で先ほどバイトをしていると言いましたが、塾の方は学校の勉強よりも先取りで授業をすることを心がけています。他の塾もほとんどがそうだと思います。今回のボランティアに行って思ったのですが、塾にいつている子で、もうその範囲は楽勝だという子をいかに集中させるかがすごい難しいなと痛感しました。

これは、2年生の数学、連立方程式の計算演習中に思ったことなのですが、当然学校で初めて加減法・代入法などをやる子は苦戦します。ただ、塾でもうやっている子は数秒で解いてしまいます。分からない子が分かる子に教わるということは、すごく良い事だと思いますが全員がそれをするとなるとやはり授業全体がしまりません。先生は終わった人はワークをやりなさ

いと言ってやらせていましたが、それも終わってしまった人はどうしても騒いでしまいます。塾で先取りをするということで、こういう現状になるんだなということを知れただけでも有意義な時間でした。

ただ、心残りがあります。それは、毎週1時間しか授業が見れなかったために、関われる生徒に限りがあったのが残念です。なので、後期からはもっといける時間を増やして子どもたちと関われる時間を増やしていきたいです。

最後に、今回のボランティアを通じて、学校で勉強を教えるということの難しさをたくさん痛感しました。ただ、それ以上に学校で勉強を教えることの楽しさややり甲斐などを再認識したと同時に、改めて自分は、子どもたちと関われることが好きなんだなと思い、さらに教師になりたいという思いが強くなりました。もっともっとたくさんの授業を見させていただいてたくさんのことを吸収して、教育実習、教員採用試験へとつなげていきたいです。またよろしくお願いします。

### 13. 「生徒とのキャッチボール」の大切さ

化学科 3年 伊藤 大樹

私は、土沢中学校に毎週金曜3限に合計9回、学校ボランティアに参加させていただきました。活動内容は、基本的には3年生の数学でしたが、現地に早く着いた時は、3年生の技術や、1年生の数学の授業にも参加させていただき、そこでは様々な経験を積むことが出来ました。

私が、今回の学校ボランティアで最も感じたことは、人にものを教えるということはやはり難しいということです。学習内容も、教師も、教材も同じでも、生徒の反応は様々で、理解度もそれぞれで全く異なります。ベテランの先生方は、集団を相手にしても、個々の理解度をお

およそ計ることができます。私とベテランの先生方との違いはなんでしょうか。それを、授業に参加しながらなんとなく考えていました。

私は、アルバイトで塾の講師をしているので、教えることに関しては慣れているはずでした。しかし、初めの3年生の数学では遅刻をしてしまい、戸惑ってしまい、その後はぼうっと先生の授業を聞いているだけでした。これではいけないと、2回目、3回目は出来るだけ生徒と関わり、授業に対する生徒の理解度を上げることに貢献しようと努力しました。その結果、少しずつですが生徒の方から「ここがわからないから教えて」などと言われるようになりました。こうして、3年生の数学の授業に、補助として毎回参加させていただくことで、少しずつ自信につながっていきました。

ある日、私は私用で3限から1限に振り替えさせていただきました。そこでは、1年生の数学の授業に参加させていただきました。いつもの3年生のクラスもユーモアあるクラスでしたが、この1年生のクラスはさらに元気あふれるクラスでした。そのクラスで授業が進むにつれ、先生の書く板書を写さない生徒を見つけました。何回か「ほら、ノートをとろうよ」と注意するうち、徐々に書き始めていきましたが、飽きたのか周りにちょっかいを出し始めます。先生は私に、その生徒についているよう指示し、私はその子の横につき、授業と一緒に受けました。ずっと横についたせいか、板書をしっかり写すようになりました。しかし、問題演習になると途中でノートを書く手が止まりました。どうやら、分数の約分がうまくできないようです。私は道筋から教えました、反応がよくありません。「最大公約数で二つの数を割ればいい」などと何回か説明しているうちに、もう解き終わってしまった隣の席の生徒が「どうしたの」と声をかけてくれました。事情を説明すると、「同じ数で割ってあげればいいんだよ」と言ってくれ、なんとなく理解したようでした。その時、生徒の理解度によって教え方を変えるべき

であったと気づきました。

理屈や理論を教え、すぐに納得して自分の知識として吸収できる生徒は、そんなに多くはいません。大多数は、すぐには自分の知識にはできないでしょう。しかし、教師はこれをさせなければいけません。ここで大事なことは、生徒に対して問いかけ、その反応を見て、教え方を変えることです。私はそれができなかったので、うまく教えられなかったと考えられます。次の週、先生の授業をみると、やはり生徒への問いかけを欠かしていませんでした。特に、別のことをしたり、授業内容が上の空になっている生徒にはよく問いかけていました。

私が将来教師になったとき、この学校ボランティアで得た経験は大きな力となると思います。生徒によって教え方を変えるということは、特に集団ではなかなかできるものではありません。しかし、できる限り個々の生徒の理解度を確認しつつ授業を進める努力はできるはずです。同じことを教えるにしても、表現はいくらでもあり、それを自在に使うにはやはり、教師自身がより学ぶことが大切であると言えます。

#### 1.4. 教えること、クラスをまとめることの大変さ

生物科学科 3年 岩下 祐樹

私は5月から7月の初旬まで初めて土沢中学校へボランティアに行き、理科や数学の授業に参加しました。活動内容として実験の準備や片づけ、授業中の机間指導をしました。また、朝の学習プリントの丸付けや昼休みの再テストなどもしました。

今回のこの学校ボランティアを通じて、今までとは異なる視点から見た授業運営の仕方や、今まで知らなかった教師としての仕事などを知ることができました。同時に、教師という立場にはまだまだ到底届かないということを痛感しました。

ボランティア初日に職員室に行くと、先生方が真剣にパソコンに向かっていたり、教材研究をしたりしているのを見て、教師の仕事量は私の想像を超える量であるということを知りました。授業に参加して、大学で私たちが行う模擬授業と、中学校で行う授業とでは生徒と教師のコミュニケーションの点において、大きな違いがあることに気づきました。実際の授業では生徒達が疑問に思ったことを積極的に質問できるような授業をしていたのが印象的でした。また、導入の仕方や授業中に生徒の記憶に残す工夫などを学ぶことができました。

理科の授業では気孔と天気に関連付けて説明したり、無機物・有機物について身の回りの物と関連付けて説明していたりして、先生は生徒の理解や興味を深めていました。授業の内容が身近なものだと感じられるような説明を加えることで、生徒にとって興味をそそる楽しい授業になると感じました。

ボランティア最終日の理科の授業は2年生の回路の実技テストを行うための日でした。この授業はA組とB組合同で、先生は別室で回路のテスト監督をし、私は理科の実験室で生徒のプリント学習を任せられました。実技のテストは4つのグループに分けられて順番に行われました。初めはテストの準備をしている生徒の話し声が聞こえていましたが、テストを終えた生徒が帰ってくるにつれて、どんな問題が出たのか、どのくらいの値になったのかなどの雑談が多くなりました。さらに、歩き回る生徒も増えてしまいました。一度は注意をしましたが、ボランティアの大学生という立場だったので、どこまで注意していいのかわからず、それ以降はできませんでした。仮りに二度目の注意をしたところで、今の私には生徒を着席させることはできなかったと思います。このことから、クラス全体をまとめるのは大変であることを知りました。

また、このテストの授業中に回路の問題について聞かれることが多々ありました。電流や回

路などの分野については忘れてしまっていることも多くて、プリントの回答に頼ってしまうことがありました。私自身はプリントの回答を見て、「ああ、そうだった」と思い出すことができました。しかし、いざ生徒に説明しようとしても、わかりやすい表現ができなかったり、図を描いて説明しても生徒に伝わらなかったりということが何度かありました。大人の私たちにとっては当然だと思っていることでも、生徒が理解できるようにわかりやすい説明をすることがこんなにも大変なことだとは思いませんでした。

このように授業で活かせることやクラスをまとめるときの課題など多くのことを知ることができ、とても良い経験をすることができました。この経験を、学ぶことの楽しさを教えられる教師になるための今後の活動に活かしていきます。

## 15. 教えるということ

数理・物理学科 2年 高橋 雄亮

私は今回の学校ボランティアで5月10日から7月19日の毎週金曜日の期間中、平塚市立土沢中学校で活動させていただきました。私の場合、「数学」「理科」「技術・家庭科」といった固定した科目を見たわけではなく、1つのクラスについて、そのクラスの授業を(朝学習から)午前中、日によっては1日見ていくという形でした。主に見ていたのが、国語、数学、英語、理科、体育でした。1,2年生を多く見る機会が多く、3年生は1回だけでした。授業では、先生の補佐として入らせていただき、練習問題を行っているときの指導(わからない子に対して)や理科の実験の事前準備、授業の見学、時には昼休みに再テスト(朝学習で合格できなかった生徒向けのため)の監督、答え合わせなどの活動を今回体験させていただきました。また、授

業の見学の際は特に先生の手伝うこともなかったので、授業を教えるうえでどのようなポイントで解説しているのかをメモしていく方式で参加させてもらい、自分にとって良い勉強になったと思いました。

今回初めてということもあって、私がこのボランティアを通して、一番感じたことは表題にも書いた通り、「教えるということ」です。今まで、授業の構成、教え方や生徒に理解しやすい授業の作り方、工夫など考えたこともありませんでした。しかし、実際、生徒としてではなく、ボランティア生、教える立場として行ってみると、それがどの先生からもよくできていると強く感じられ、また、多くのことを学べることができた貴重な2ヶ月でした。

特にそれが1番強く感じた授業は数学でした。

ちょうどそのときは中学2年生の「連立方程式の応用」の内容で、速さ、時間、距離を $x, y$ を使って求める問題を教えているところでした。通常頭を使う問題、大抵の生徒はやり方がわからず、放棄してしまう場合も多いと思うのですが、この授業では、表を使ったまとめ方の解法で多くの生徒を理解へと導いていきました。こんな工夫があるのかと痛感させられた授業でした。

数学だけでなく、国語や英語、理科、体育でも感じることも多かったです。中でも、1番驚いたことは体育の授業でした。

自分たちの時代と大きく異なっていたことが、2点ありました。1点目は体育の授業での電子機器の使用です。バトミントンなどのフォームなどをビデオカメラで撮影をし、その後、テレビなどを使い、フォームについての改善点を1人1人指導できるという工夫がなされていたこと。

もう1点は体育の教科書を使った授業の展開でした。実際、図表を見ながら技のやり方、種目の競技上での注意点を教えながら、授業を展開していく形でした。

この2つの教科のように授業をする上でかなり先生達の工夫がされていることがわかりました。

しかし、全員に理解してもらえるのはかなり困難なことです。今回この学校ボランティアに参加できて、良かったと思える点としては、子どもがどういったところで躓いているかがわかったことでした。そういった点も知ることができたのも、今回参加させてもらって、自分にとっての経験を積むことになったので、満足しております。

私は現在、そろばんの講師と塾の講師の仕事をやっています。この仕事を通して、私は先生の道を進みたいと思ったのです。ただ、実際やって見ていると、子どもにどのように教えるのか、理解してもらえるだろうか、どのようにしたら、生徒のやる気を上げることができるだろうか？と常々思っていました。これを少しでも理解したいと思い、学校ボランティアをやらせていただきました。

今後もこういった活動を積極的に参加していきたい、自分のレベルを上げていきたいと思っています。

## 16. 教育の壁～クラス間の違い～

化学科 2年 横山 貴裕

私は、土沢中学校で5月8日から6月26日までの毎週水曜日に学校ボランティアをさせていただきました。朝は神奈川大学の学生がまだ乗らないような時間にバスに乗り、眠たい目を擦りながら朝8時20分に登校しました。私は半日の間1つのクラスに入り数学や理科、国語に英語、時には体育や技術家庭など様々な授業に参加させていただきました。

土沢中学校では水曜日の朝学活で毎回「鴻巣タイム」という小テストを行っていました。これは毎日の授業で学んだ基礎的なことをテスト

するものです。私たち神奈川大学の学生は採点や再テストの管理をしました。

今回の学校ボランティアで私が感じたのは、その鴻巣タイムのテストを通してしてみると、2つのクラス間で理解度に差があることです。テストであるので、当然合否があります。成績には関係ないものですが、生徒たちは合格するために一生懸命頑張ります。最初の1,2週はほとんどみんな合格だったので、何も気にしないで採点していたのですが、回数を重ねていくと、いつも合格の生徒といつも不合格の生徒に分かれていきました。さらに回数を重ねると、合格者の人数は2つのクラス間で大きく異なっていきました。

ある日、A組ではほとんどの生徒が社会のテストで満点を取るのに対し、B組では半分以上が不合格でした。しかし、B組の生徒の解答用紙は白紙ではなく、ほとんどの生徒は完答していました。あまりに不合格の生徒が多く、気になったのでB組のテストを細かく見ているとみんな同じところで同じ間違いをしていることがわかりました。例えば「旧石器時代」と答えなくてはいけないところで「縄文時代」と答えてしまうなど、先生の授業での話し方によってクラス全体で大きな勘違いを生んでしまうかもしれないと考え、実際に自分が授業をする立場になった時の教育という難しさを痛感しました。授業を見ているとA組もB組も大差はなく両クラスともきちんと席に座り先生の話聞いていました。しかし結果的にA組とB組の間には理解した内容に差ができています。機械ではないので全く同じ授業を両クラスで行うことは無理ですが、授業をする立場の先生は両クラスの生徒がまんべんなく理解できるように工夫を凝らすことが大事だと思いました。

生徒として、授業を受ける立場から自分が授業をするために授業を見学する立場になって、自分が中学、高校のころに考えもしなかった先生方の工夫が見えてきました。学校にはいろいろな生徒がいます。中には女子学生でないと教え

てもらいたくないという女子生徒もいましたし、家では自分の時間が作れず勉強できない環境で学校の授業についていけない生徒や、逆に学校の授業では簡単すぎてもっと難しい問題に挑戦したいと訴える生徒もいました。そのような生徒一人ひとりに対応し、日々理解してもらう授業をすることはとても大変なことであり、難しいことです。まずは自らが生徒一人ひとりを理解していき、クラスに合わせた授業をしていくことが大切だと感じました。

## 17. 一人ひとりに合った教え方をする難しさ

総合理学プログラム 2年 石川 航大

私は5月8日から7月16日までの計10回（水曜日9:50～12:00）、平塚市立土沢中学校で学校ボランティアの活動をさせていただきました。主な活動内容としては理科及び数学の授業に入り、練習問題や演習問題に生徒たちが取り組む際に分からないところなどを教えるというものでした。

今回の活動を通して感じたことは、同じ内容を教えるのでも、教える生徒がどこまで理解しているのかを考え、その生徒が分かりやすいように教え方を変えるということの難しさです。

学校の授業は一斉授業なのでクラスの生徒全員が授業内容を理解できるということはほとんどあり得ません。頭ではそのことを把握していましたが、いざ生徒に教えてみると分からないところが同じでも生徒によって理解している度合や理解の仕方が違うので、分からないところを質問され教えるときに「さっきの子と同じ教え方じゃ伝わらないのか」と教える側であるはずの自分が戸惑ってしまうことが多々ありました。

私は今回の活動では1年生と3年生の数学の授業に入る機会を多くいただきました。1週間に1回しか学校ボランティアに行っていないの

で、次の週には大抵新しい内容または少しステップアップした内容に入っているのですが、毎週変わっていく内容の中で多く質問される場所は何か所か必ずあります。例えば1年生では3-8といった小さい数から大きい数を引いた時の答えの出し方や $-a \times b$ や $-2ab \times -4b$ といった文字式など答えの符号の決め方などが、3年生でいうと $(a+b)(a-b)$ などの公式の展開や、平方根を含んだ方程式の計算などが挙げられます。

しかし、多く質問される内容でも、質問してきた生徒のこれまでの授業内容の理解度を説明している最中にこちら側が理解し、それに基づいて説明内容を変えていかなければ、生徒には伝わりません。例えば $-2a \times -3bc \times -7d$ という問題に関する質問に対して、「式の中に-の記号が奇数個あるから答えの記号は何になる？」というヒントと出せば分かる生徒もいれば、「+と-を掛けたら答えの符号は何になる？」というところからヒントを出すと分かる生徒もいます。このように質問してきた生徒に対し、その生徒が理解できるところまで噛み砕いて説明することがとても重要なことであり、とても難しいことでもあるということが今回の活動を通してとてもよく分かりました。

他人に何かを教える、特にそのことに関してのスペシャリストとも言える教師は、教える際にただ自分の理解していることをそのまま相手に押し付けるのではなく、教える生徒の現状を理解し、その生徒が一番理解できるような表現で教えていかななくてはならないと思いました。このことをできるようになるには、生徒の現状を見極める力や、様々な角度から説明ができるような語彙力が必要になるのではないかと思います。ですがこのようなものは、教科に関する知識を蓄えただけでできるようになるものではなく、学校ボランティアのような課外活動を通して様々な経験をすることによって養われていくものではないかと私は思います。

今回の学校ボランティアの活動を通して、自

分の教えることの未熟さなど自分に足りないものが多く見つかりました。今後はこの反省を生かして教える人に対して、最も分かりやすい教え方ができるようなるために自分に必要なことを補っていきたいと思っています。そのために様々な経験が積めるように自ら色々なことにチャレンジしていき、今の自分に甘んじることなく将来より良い教師になれるように努力していきます。

## 18. 教師という職業

総合理学プログラム 2年 田中 悠平

4月から7月の毎週水曜日の8:40～12:40の間、土沢中学校でボランティアをさせて頂いた。

内容は鴻ノ巣タイムで行うテストの採点、そのテストで合格点に満たなかった場合の再テストの対応、化学室の片づけ、授業中に行う演習問題での生徒へのサポート等だ。鴻ノ巣タイムで行うテストは先生が学習到達度確かめる。また、合格点に満たない場合は生徒が再テストを受けることで関心・意欲・態度の評価に加点する。このテストの採点からは、文字の汚さや落書きなどから汲み取れる生徒の心情がとても興味深かった。

先生の近くで活動させて頂いて、授業の工夫やさりげない生徒とのやりとりがとても勉強になった。それは長い経験や生徒との信頼関係があるほど円滑にできる事に気づいた。また、教師の仕事全体から見ると授業の割合は大きくないことが分かった。例えば理科の先生なら、化学室の片づけや掲示物の整理などがあったり、担任の仕事で学級通信を作ったり、生徒指導をしたりする仕事がある。純粋に授業の準備だけをする時間を作ることは難しそうだと感じた。

他には生徒と話したり、昼休み中の生徒の様子を見たり、掲示物を見たり、授業を見たりし

て中学生の頃の純粋な気持ちを思い出した。そして、すっかり忘れていた当時の夢や何をして楽しかった日々を思い出した。

土沢中学校でのボランティアを経て、私は教師という職業について初めてしっかりと考えた。

授業が終わり先生と職員室に戻るとき、先生から生徒の進路のことや授業のことを伺った。それを聞いて、学校は、先生方が生き方を教え、科学の楽しさを伝え、生徒が成長する過程を見守る場所であると思った。生徒のことを第一に考えて安心を与えるべき立場になる。つまり安心を受け取る立場から安心を与える立場への変化がある。そして教師は何よりも生徒への安心と安全、進路相談などの様々な責任を背負わなければならない立場だと感じた。

私はこの活動で、定時に帰れないことが多いこと、私が考えていたより多い事務作業があること、一日中気を張り詰めること、ゆっくり休む時間はほぼないこと等の教師という職業の現実を知った。

この活動を経験しないで教師になると、自分の想像と現実の違いに驚きを隠せず、とても辛いと感じる人もいるだろうと思った。

しかし私は現実を知ったのと同時に、教師という職業の楽しさとやりがいも体感し、より一層教師になりたいと思った。子どもが大人になる過程を見守りたい。学校の楽しさを伝えたい。生き方を教えたい。これらの思いがより一層深まった。

何よりも忘れてはいけないことは、生徒の事を第一に考えること。生徒の些細な気持ちの変化を汲み取ること。そして教師は、生徒に教える立場ではあるが、逆に考え方や発想など多くのことを教わる立場でもあるということだと思う。

最後に、この活動で思い出した中学生の頃の気持ちやより一層深まった教師という職業への思いを忘れずに残りの大学生活を全力で過ごそうと思う。そして自分の理想の教師になれるよ

うに努力していく。

## 秦野曾屋高等学校・前期

### 19. 1つのクラスを持つということ

生物科学科 科目等履修生 小椋 光

私は、4月から秦野曾屋高等学校の校内学習塾「曾屋塾」のボランティア講師として学習支援をさせていただきました。曾屋塾は希望の生徒が自主的に入塾して、放課後の時間を使い、ボランティア講師に授業でわからなかったことなどを質問して、自学・自習をする場所です。

私はその曾屋塾で、基本的には毎週水曜日の15:45～16:45の1時間を、生物科学科の西田紘章さんと2人で学習支援させていただきました。生徒の数は1年生5人、2年生2人の計7人に、数学ⅠA・ⅡBを教えました。

私がこれまで経験してきた中学校ボランティアでは、先生が教室全体を見渡し、ボランティアの学生が授業についていけない生徒を見つけ、その生徒を教えに行くということをしてきました。今までクラス全体の中の1人をみるということをしてきたのですが、曾屋塾では、教室全体を見るということをしなければならないということに気づきました。視野を広く持つためには、全体の流れを意識すること、1人の生徒を教え終わったら教室全体を見るが必要だと感じました。

自学・自習といっても生徒が自学・自習をするための教材を何も持ってこなかったり、忘れてきたりする可能性があるので、毎回プリントを作成して、生徒に配り、何も自学・自習するものがない生徒はプリントの問題を解いていくという形をとりました。プリントは、生徒に授業の進み具合を聞き、さらに1人ひとりの生徒が苦手としているところを聞いて、その範囲の問題ができるようなプリントを作成するようにしました。

プリント作りで大変だったところは、1年生

と2年生が両方いるので、I A・II Bのプリントを同時に作成すること、1人ひとりの生徒が苦手なところやできないところが違うこと、レベルの差があることでした。すらすら問題が解ける生徒は、プリントの内容を簡単にしすぎると物足りなさを感じてしまい、逆にその生徒にあわせると問題が難しくなってしまうので、他の生徒たちが問題を解けなくなってしまう、生徒たちのやる気を削いでしまう可能性があるということがわかりました。バランスをとるのは難しいことですが、曾屋塾の時間は授業ではできなかったことをできるようにするということが1つの目的であると考えているので、生徒がレベルアップするには大事なことであるということを感じました。また、1年生をずっと見てしまうと2年生にまで目を向けられなくなり、2年生をずっと見てしまうと1年生に目を向けられなくなる、ということがありました。

生徒たちは、わからない問題がでてきたらすぐ質問をしてくれます。質問をするということはとてもいいことなのですが、「なぜわからないのか」を考える前に質問してしまっているのので、「なにがわからないか、わからない」と言われることが多くありました。まず質問されたら何がわかって、何がわからないのかを明確にし、一度考えさせるというステップを踏んでいかないと、本当の理解を定着させることができないと感じました。また、私は解き方や答えを質問されたらすぐ答えをいってしまうという傾向があるので、すぐ答えを教えることで生徒が「なぜこうなるのか」を考えない可能性があると考えました。

生徒たちに理解させるためには、途中式が重要だと感じました。「こうなって、こうなって、だからこうなる」ということを意識し、途中式をきちんと書くようになればどこで間違えたのかわかり、何がわからないのかを明確にできると思いました。

曾屋塾を通して、生徒に出会える喜びを感じました。学習意欲を持っている生徒が集まって

いるということもあり、生徒たちの雰囲気もよよいように感じます。教室を1ついただき、7人の生徒をもち、自由に教えてよいというなかでできない経験をさせていただいているので、この経験を通して、生徒たちと一緒に成長していき、たくさんのことを学んでいきたいと思えます。

## 20. 風が吹いたら桶屋が儲かる ～論理的思考を定着させるために～

生物科学科 科目等履修生 西田 紘章

私は2013年4月から秦野曾屋高等学校において、曾屋塾の講師として活動を行って来ました。曾屋塾の主な活動内容は、高校1年生と2年生に対して、数学I, A, II, Bの問題演習を中心に行いました。曾屋塾では、曾屋高校からの学習指示は一切無く、講師たちで学習することを判断し決定します。私は、神奈川大学・生物科学科の小椋 光さんと共に講師を担当し、二人で学習計画を考えました。私達が担当する曾屋塾には1年生が5名、2年生が2名参加しています。曾屋塾が始まった当初は、生徒の学力レベルがわからず、基礎レベルの問題から応用レベルの問題まで、出題範囲を広く設定し、問題を作成しました。

今回、秦野曾屋高校でのボランティアを通して、生徒と直にふれあうことができました。その中で、論理的思考が身につけていない生徒が多数見られました。

問題を演習させてみると、個人個人の学力に差が見られ、以下の3パターンに分けることができました。

1. 自力で基礎問題を解答することが出来ない生徒
2. 基礎問題は自力で解答出来るが、応用問題になると講師からのヒントがあっても解答が出来なくなる生徒
3. 基礎問題も自力で解答でき、応用問題に関

しては講師からのヒントがあれば自力で解答できる生徒

今回、基礎問題は解答出来ないが応用問題は解答出来るという生徒は見受けられませんでした。この3パターンの生徒たちの演習しているプリントや学校の授業で使用しているノートを見てみると、違いがありました。それは情報量の違いです。1番,2番にあたる生徒はノートに空白が多かったり、途中式が少なかったりしていました。本人になぜ途中式を省略するのか聞いてみた所、「途中式を書かなくても計算できるから。」や「面倒くさいから。」との答えが返ってきました。一方で3番にあたる生徒の演習しているプリントやノートを見てみると、途中式を省略することなく解答をしていました。本人になぜ途中式を省略しないのか聞いてみた所、「途中式を省くとわからなくなる。」との答えが返ってきました。一見、途中式を頭の中で完成させている生徒のほうが賢いようにも思えますが、その生徒は「答え」が正解であるかという点にしか着目をせず、計算の途中が正解であるかは考えていません。しかし、途中式をすべて書く生徒は「計算の過程」が正解であるかという点に着目をしています。「計算の過程」が正しければ、当然「答え」も正しいものとなります。途中式というものは計算と計算をつなぐものです。例えば「 $A=B=C=D=E$ 」という計算過程を経る数式があるとします。1番や2番に当たる生徒はいきなり「 $A=E$ 」に行き着こうとしたり、「B」と「D」の計算を省略し「 $A=C=E$ 」と計算しようとしたりします。なぜ、そのように計算してしまうかという点、数式の連続性が理解できておらず、論理的思考が身につけていないものだと考えます。

今回、論理的思考について考えてもらう為に「風が吹いたら桶屋が儲かる」ということわざを使用しました。そして、生徒たちに、どうして風が吹いたら桶屋が儲かるのか理由を考えてもらいました。途中式を省略しない生徒は、様々な視点で理由を考えることができ、さらに

考えた理由はきちんとイコールでつなげることができていました。しかし、途中式を省略してしまう生徒は、「風が吹いたら」からイコールでつながるような理由を作ることができていませんでした。

今後、9月からも曾屋塾の講師を行えることになっており、生徒たちには継続して論理的思考の重要性を伝えていきたいと思います。

最後に、貴重な経験を与えてくださった秦野曾屋高校の先生方、鈴木 そよ子先生、日野 晶也先生に感謝いたします。

## 2.1. 教師の必要性和それに伴うべき能力

情報科学科 3年 丸山彩恵子

5月末から7月初旬まで計5回、曾屋高校が運営している曾屋塾へ数学・物理の学習支援に参加させていただきました。生徒主体の自立型学習を支援するため、生徒が自分で用意したテキスト・プリント等に沿って質問に答えていくシステムでした。2年生と3年生に受講していただきました。

決して多くない活動の中で、生徒たちに“教師に求められる力”を改めて教えられたように思います。教科に限らず色々な面で生徒たちから教わりました。

これは私の逃げですが、新指導要領の範囲については中々上手な説明が出来ませんでした。誰かに分かってもらう為には“自分が的確に理解していなければならない”当たり前の事です。が、中学校ボランティアの時にはあまり気にならなかった危機感を覚えました。

また、何より怖いと思ったのは進路の相談でした。一生懸命夢を話してくれました。自分にも同じように夢を人に話したことはありましたが、相談と言う形で話したことはありませんでした。一生懸命話してくれるほど、正面から向き合わなくてはいけないと強く感じました。そ

れと同じだけ、「自分が浅い知識で助言して良いのだろうか?」と不安に思いました。もし、ここで言った事が背中を押すことになったら、足を引っばることになったら、その結果を受け止められるだろうかと考えてしまいました。

夢を叶えて教師になれたとして、進路指導など出来るのかとても怖くなりました。教員になるのが夢になった時は良い影響になる人というのを漠然と考えていましたが、実際にその疑似体験のような状態になって言えたことは「たくさん悩んで」ということだけでした。生徒の夢の叶え方にはいくつか方法を思いつきましたが、どれ一つとして自分が体験した方法ではありませんでした。どんなときに苦勞して、どうやって解決できるのか全く知りませんでした。自分の知識は足りないことだらけであることを生徒に指摘されたように思えました。

大学に持ち帰って話し合いの場で題材にした時、今の自分の知りえる範囲で答えてよい。それを利用するのもしないのも生徒自身であるという結論にいたりました。確かに相談するときは結論の後押しをして欲しいというのが大抵で、本当に決めて欲しいというのは極一部です。しかし、その結論を言えるのは相談された事へ多くのリスクや色々な見方で答えられたときだけではないかと思えます。生徒にとって必要な教師は教科についてのプロであり、そして自分の先を生きている人なのではないかと考えました。先生は学力をつける人である前に先輩である。生徒より先に色々な事を見て、聞いて知っている人である。

ここまで教師になる事への不安を述べてきましたが、決して諦めたいとは思いません。それは、たった5回の活動の中で生徒が見せてくれた“分かった瞬間の笑顔”や“必死に考えている表情”を一番近くで支えたいという思いが一層強くなったからです。一生懸命話してくれた夢を応援できるように色々な体験をしなければいけないと改めて教えられた活動でした。一緒

に勉強させていただいて、ありがとうございました。